

# いくつかの「おもしろい」事態

- 『Sくん仕事依頼主の高齢者に仕事をとられる』
- 『Iくん窃盗で年上の遊び仲間が増える』
- 『元ひきこもり10年選手のOくん、  
出て行こうとしたら引き止められる』



# これまでの成果

社会で上手くいかない若者が地域活性化の触媒になる



どうしたって上手くいかない若者が、地域の生活にお邪魔すると、地域の人々の暮らしが、人との交わりを中心に再構成させていく（触媒になる）。二者関係から多者関係へ。

地域の人と響きあうことで、「お節介」を誘う



上手くいかなかった体験を重ねる若者に職員がとことん「付き合い」、「筋を通」させ、地域の「お節介」を誘う。地域の人と若者がどこかで響き合う（趣味・傷ついた記憶・孤独等）ことで、お節介を簡単に諦めさせない。

支援者も地域とともに成長していく



「支援者」がそもそも一人という状況で、葛藤と限界（自分でなんとかしたい。けど全部はできない）をくぐり抜け、支援観が転換してきた。  
「利用者って言うより仲間みたいなもの」「色んな人の目に（私も）支えられている」

福祉と教育と労働の分断状況において、コミュニティワークの持つ潜在可能性は、「お節介」と「お互いさま」が、現代的に機能する「暮らし」を作り直す営みではないだろうか。

➡どんな人でも人間的に存在することが可能な範囲の拡張

誰がきても、受け止める町になれるという期待感が月形に芽生えてきたのではないか。